

# 平成19年度新潟市大腸がん検診成績

新潟市医師会大腸がん検診検討委員会 月 岡 恵

平成19年度の新潟市大腸がん検診成績について報告する。

新潟市の大腸がん検診は、平成19年度に一部の地域で検診方式の変更があった。平成17年の市町村合併以前の大腸がん検診は、旧新潟市では施設検診方式で、それ以外の市町村では集団検診方式で実施されていた。合併後、新津地区を除く新合併地区では経過措置として集団検診方式が継続されていたが、今年度から白根地区と豊栄地区の経過措置が終了し、施設検診方式へと移行したのである。

表1 新潟市大腸がん検診成績 平成19年度

受診者数	60,645人
要精検者数 (率)	5,079人 8.4%
精検受診者数 (率)	3,148人 62.0%
確定大腸がん	275人
進行がん	71人
早期がん	187人
報告がん	17人
大腸がん発見率	0.45%
早期がん割合	72.5%
その他の病変	1,882人
がんの疑い	4人
大腸腺腫	1,294人
その他のポリープ	209人
大腸憩室	200人
潰瘍性大腸炎	5人
その他	170人
異常なし	986人
結果不明	5人

## 検診成績

平成19年度の新潟市大腸がん検診の成績は表1の通りである。

受診者数は60,645人(前年度比プラス5,807人)へと今年度も大幅に増加した(図1)。内訳は男性が22,202人(同プラス2,239人)、女性が38,443人(同プラス3,568人)である(図2)。

要精検者数は5,079人、要精検率は8.4%(前年度と同じ)であった。また、性別の要精検率は男性が11.1%(前年度比マイナス0.4ポイント)、女性が6.8%(同プラス0.1ポイント)であった(図3)。

精検受診者数は3,148人(同プラス369人)、精検受診率は62.0%(同プラス1.7ポイント)で

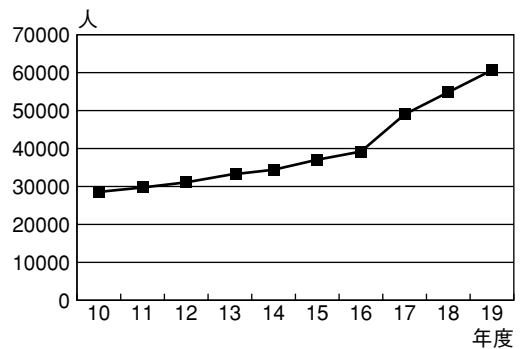


図1 最近10年間の受診者数の推移

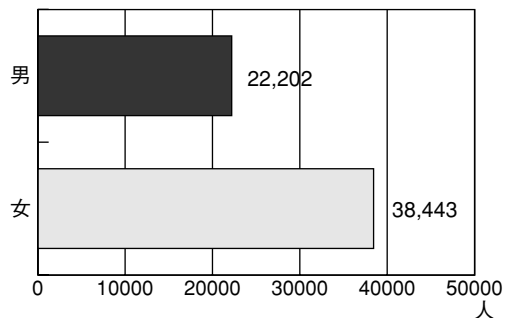


図2 男女別受診者数

あり、精検受診率は4年連続の微増となった(図4)。

発見された大腸がんは275人(同プラス52人)、検診受診者に占める大腸がん発見率は0.45%(同プラス0.04ポイント)と高水準を維持している(図5)。発見大腸がんの内訳は進行がん

が71人(同プラス2人)、早期がんが187人(同プラス36人)、報告がんが17人であった。男女別の大腸がん発見率は男性が0.70%(同プラス0.03ポイント)、女性が0.31%(同プラス0.05ポイント)と性差は顕著である(図6)。早期がん割合は72.5%(同プラス3.9ポイント)と過去

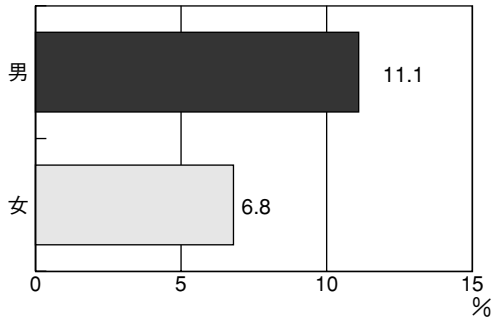


図3 男女別要精検率

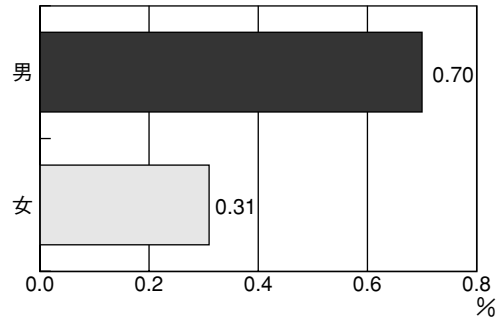


図6 男女別がん発見率

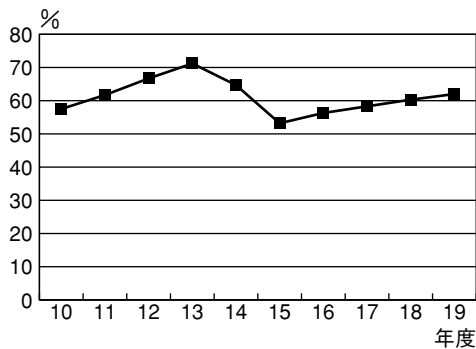


図4 最近10年間の精検受診率の推移

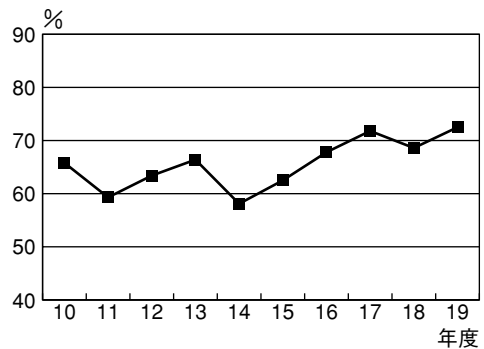


図7 最近10年間の早期がん割合の推移

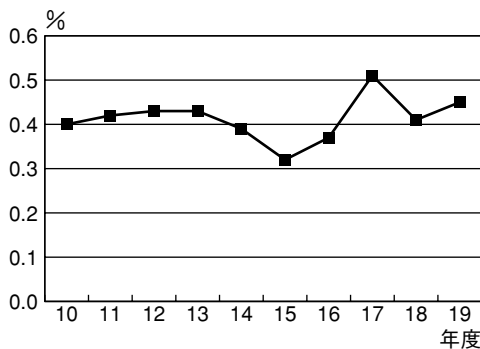


図5 最近10年間の大腸がん発見率の推移

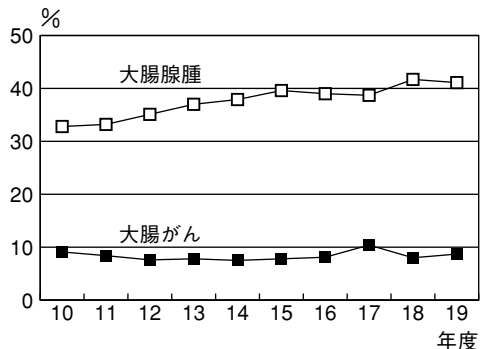


図8 精検受診者に占める大腸がんと大腸腺腫の発見率

最高となった（図7）。

その他の病変は1,882人で発見された。内訳はがんの疑い4人、大腸腺腫1,294人（同プラス135人）、その他のポリープ209人（同プラス9人）、大腸憩室200人（同プラス39人）、潰瘍性大腸炎5人（前年度と同じ）、その他170人である。なお、その他には悪性黒色腫の1人が含まれている。

精検受診者に占める大腸がん発見率は8.7%（前年度比プラス0.7ポイント）、精検受診者に占める腺腫発見率は41.1%（同マイナス0.6ポイント）であった（図8）。

### 発見大腸がんの検討

発見大腸がんの深達度（複数のがんが発見された例ではより進行したものを集計）は、深達度 m が130人、深達度 sm が51人、深達度不明の早期がんが6人、深達度 mp が25人、深達度 ss (a<sub>1</sub>) が44人、深達度 se (a<sub>2</sub>) が2人、深達度不明のがんが17人であった（図9）。

発見大腸がん（複数のがんが発見された場合は重複して集計）の深達度と部位の関連では、早期がんは直腸が57病変（29.1%）、S状結腸が71病変（36.2%）、下行結腸が8病変（4.1%）、横行結腸が19病変（9.7%）、上行結腸が30病変（15.3%）、盲腸が11病変（5.6%）であったのに対し、進行がんは直腸が19病変（26.0%）、S状結腸が16病変（21.9%）、下行結腸が6病変（8.2%）、横行結腸が7病変（9.6%）、上行結腸が15病変（20.5%）、盲腸が10病変（13.7%）であり、例年と同様に進行がんは上行結腸と盲腸で、早期がんはS状結腸で発見される比率が高かった（図10）。

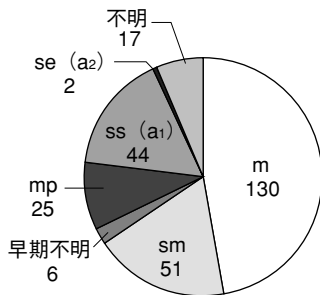


図9 発見大腸がんの深達度

発見大腸がん（複数のがんが発見された場合は重複して集計）の深達度別の性比は、m がんでは1.51（男89病変、女59病変）、sm がんでは1.55（男31病変、女20病変）、mp がんでは1.50（男15病変、女10病変）、ss 以上では1.09（男24病変、女22病変）であり、深達度 ss 以上の進行がんのみが相対的に女性の比率が高かった（図11）。

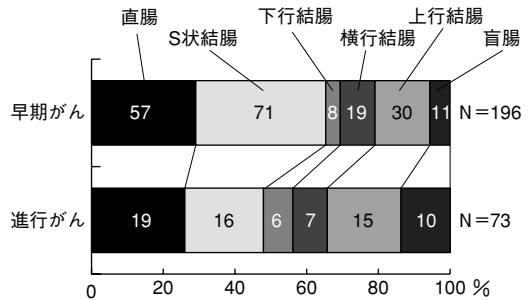


図10 発見大腸がんの部位別比率

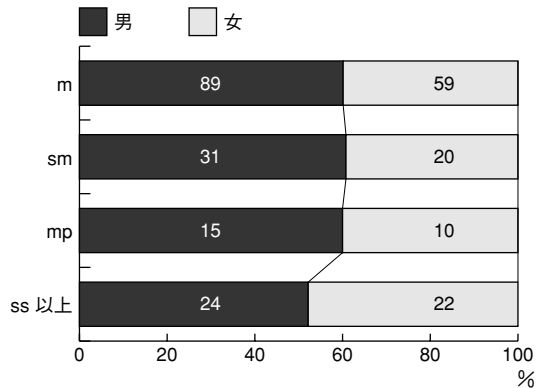


図11 発見大腸がんの深達度別の性比

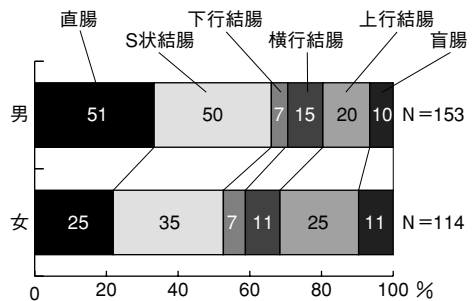


図12 発見大腸がんの性別の部位

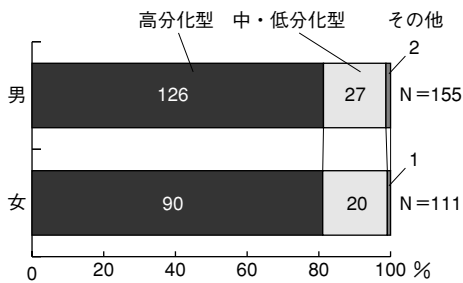


図13 発見大腸がんの性別の組織型

発見大腸がんの部位を性別で比較したものが図12である（複数のがんが発見された場合は重複して集計）。男性は直腸が51病変（33.3%）、S状結腸が50病変（32.7%）、下行結腸が7病変（4.6%）、横行結腸が15病変（9.8%）、上行結腸が20病変（13.1%）、盲腸が10病変（6.5%）であったのに対し、女性は直腸が25病変（21.9%）、S状結腸が35病変（30.7%）、下行結腸が7病変（6.1%）、横行結腸が11病変（9.6%）、上行結腸が25病変（21.9%）、盲腸が11病変（9.6%）であり、女性では上行結腸と盲腸の、男性では直腸の比率が高かった。

発見大腸がん（複数のがんが発見された場合は重複して集計）の性別の組織型は、男性では高分化型が126病変、中・低分化型が27病変、その他2病変であったのに対し、女性では高分化型90病変、中・低分化型20病変、その他1病変であり、今年度の集計では性差はみられなかった（図13）。

#### まとめ

- 1) 平成19年度の新潟市大腸がん検診受診者数は、白根地区と豊栄地区が施設検診方式に移行したことにより前年に引き続いて大幅に増加した。
- 2) 精検受診率は4年連続で微増した。
- 3) 大腸がん発見率は、依然として高水準が維

持されていた。

- 4) 発見大腸がんの早期がん割合は、過去最高となった。
- 5) 精検受診者で腺腫または大腸がんが発見される割合はおおよそ50%である。
- 6) 発見大腸がんの検討から、進行がんは上行結腸・盲腸で、早期がんはS状結腸で発見される率が高かった。

#### 平成19年度の総括

- 1) 平成19年度の新潟市大腸がん検診は、旧白根地区と旧豊栄地区が従来の集団検診方式から施設検診方式に移行して実施された。一般に施設検診方式では集団検診方式より受診者数が増加することから、今年度の検診受診者数の大幅な増加は検診方式の変更に負うところが大きいと考えられる。平成20年度には新潟市全域が施設検診方式となるため、更なる受診者増が見込まれる。このように大腸がん検診が拡大する中で、精検受診率がわずかずつではあるが上昇傾向にあり、大腸がん発見率が高水準に維持されているのは、関係者の多大なご協力の賜物である。
- 2) 大腸がん検診における大腸がん発見率の性差は今年度も顕著であった。また、女性で深部大腸がんの比率が高いという現象も引き続き認められた。大腸がんの5年生存率に性差があること（男75.0%、女68.5%）、予後の悪い低分化・中分化腺がんや粘液腺がんが相対的に女性に多いことは新潟県がん登録からのデータ分析で明らかになっている<sup>1)</sup>。ただし、今年度の集計からは発見大腸がんの組織型における性差は認められなかった。

#### 文献

- 1) 月岡 恵：大腸がん検診. 新潟市医師会創立百周年記念誌：188-196, 2008.